

志賀町の古寺に眠る大蔵経 能登半島地震を機に初調査

志賀町の真宗大谷派常徳寺で昨年8月、全2095冊にも及ぶ江戸時代の経典「黄檗版大蔵経」の調査が行われた。能登半島地震で境内にある経蔵の一部が壊れたのを機に、文学部の森雅秀教授らが確認した。経蔵には経典以外にも多くの資料が残されており、地元関係者は今後の進展に期待を寄せている。



地震で破損した輪蔵(左)と経蔵

黄檗版大蔵経は江戸時代初期、黄檗宗の僧だった鉄眼が中国から渡来した「万歴版大蔵経」をもとに作ったとされ、宗派を問わず各地の有力な寺院に広まった。常徳寺では、真宗大谷派の高僧で15代住職も務めた得住が黄檗版大蔵経を収集。275個の箱に収められた大蔵経は、本堂のそばにある経蔵内の「輪蔵」(大蔵経を収納する棚)に保管されていたが、昨年3月の能登半島地震で中身が散乱したため、現在(20代)の藤懸了世住職が知己の仏教研究者を通じ、



8月に行われた調査で経典の修復作業にあたる学生

森教授らは昨年5月に常徳寺を訪れ、経蔵内の様子を確認。8月2日から3日間、日本史と民俗学専攻の准教授2人、学生16人とともに散乱した大蔵経の整理と修復にあたった。本堂では、白い手袋をはめた学生たちが真剣な表情でのりづけやホコリ払いなどの作業

学生が手作業で修復 門徒向けの説明会も開く

大学に修復と調査を依頼した。藤懸住職は、「幼いころから大蔵経の存在は聞かされていたが、具体的に中身がどのようなもので、どれほどの価値があるものかが分からなかった」と振り返る。



常徳寺に保管されていた黄檗版大蔵経

を進め、修復を終えた大蔵経は購入したスチール製の棚に仮置きされた。翌3日午後には開かれた門徒向けの説明会では、黄檗版大蔵経の由緒や中身に関する質問などが相次ぎ、手次寺門徒が所属する寺への関心の高さをうかがわせた。調査は補足する形で11月にも行われた。各地に伝わった大蔵経は、全て消失したり、欠本したりしたケースが多くあるとみられるが、同寺の黄檗版大蔵経は完全な状態で残っていた。欠本なしの状態で見つかるのは珍しいという。

また、大蔵経には得住本人の書き込みとみられる朱書きが見つかったほか、経蔵内には密教や和歌に関する書物、浄財の内容を示す寄進札、廃仏毀釈運動を進めた明治政府を批判する手書きの建白書など、貴重な資料が数多く残されていた。森教授は「これらを読み



調査の成果を語る森教授

藤懸住職は「学生さんたちの修復作業はありがたかったし、(大蔵経の)丁寧な扱いをとてもうれしく感じた。先生からは保管方法や中身について聞くことができて安心した。大学のような存在は本当に頼もしい」と胸をなで下ろし、「これからも研究を目的とした学生さんの来訪には快く応じたい」と話す。森教授によると、大蔵経以外の資料の分析は今後も継続的に進めていくといい、新たな史実の発見や、常徳寺と大学のさらなる交流に期待が集まっている。

「大学は本当に頼もしい」 今後の継続調査にも期待

解くことで、当時の得住の思考や常徳寺を取り巻く経済的、社会的な状況が透けて見えてくるはずだ」と語る。



学生らの来訪を喜ぶ藤懸住職